The Journal of Faculty of Developmental Education,
Kansai University of Social Welfare Vol.1, *2015.6*
pp.*97 − 101*

研究資料

自己カテゴリ化にみる日本の若者文化

Youth culture in Japan from the viewpoint of self-categorization

大和田智文＊1

要約：本研究の目的は，自己カテゴリ化によって若者文化がどのように捉えられるのかを明らかにすることを通して，若者文化に関する一視点を提案することであった．具体的には，自己カテゴリ化理論に従い，現代の若者の一特徴とみられる行動傾向の把握のされ方に世代間差異がみられるのかを検討した．さらに，その差異に自己カテゴリ化の有無が関連しているかもあわせて検討した．その際，関西地区の大学学部生（「若者」に相当）164 名, 関東地区の社会人（30 歳代以上）56 名, 計 220 名を対象に質問紙調査を実施した．その結果，現代の若者の一特徴とみられる行動傾向の把握のされ方には世代間差異がみられ，またその差異には自己カテゴリ化の有無が関連していることが示された．このことから，自身のカテゴリとは異なったカテゴリが顕在化されることによって，顕在化されたカテゴリへのバッシング（異文化間行動）が発生する可能性が示唆された．

Key Words：若者文化　自己カテゴリ化　世代間差異　被奉仕志向性

問　題

検索エンジンで「若者文化」を検索すると，「若者のオタク化」,「アキバ系」,「サブカルチャー」などに関連する記事が数多く見出される．こうしたものは近年特有の事象であり，一昔前であれば，たとえば「ケータイ」,「カラオケ」,「フリーター」などが見出されたことであろう（広田，2008 参照）．このように時代による違いはあるものの，若者文化とはある時点における世相や流行を端的に表すものであり，またその後の社会的変化を見通すための予測因子としての役割を果たすものでもあることに概ね異論はないだろう．また, 我々が「若者文化」と表現するときには, そこにその他の「文化」とは異なった何らかの存在・機能をアプリオリに与えているようにも思われる．

以前より「今の若者は」という言い方がされるところからも分かるように，一般的に人は「若者[1)]」に対して他の世代とは異なったさまざまな要素を見出し，「若者」世代を特徴づけようとする．もしもそのように特徴づけられた結果を「若者文化」と呼んでいるならば,「若者文化」の把握のされ方は世代によって異なると考えられるが，実際はどうなのだろうか．

これまでの若者文化に関する諸研究では，たとえば「オタク」,「文学作品（読み物）」,「音楽生活」,「ファッション」といった事象に着目したものが多い（e.g., 南田，2006；宮台，2009；中川，2009；大多和，2008）．ここでは若者文化はいわゆるサブカルチャーとして語られている．すなわち，世代内差異としての若者の行動様式一般について論じられている．

一方，若者が見慣れぬ存在として社会に現われるとき若者文化が形作られたり（難波，2004），先行する若者文化の大衆化・一般化によって今日の若者文化が形成される（伊奈, 2004）といった見解もみられる．ここでは，「若者」の内部に観察される事象そのものではなく，他の文化や社会との比較によってはじめて浮き彫りにされる若者像についての議論がなされている．すなわち，世代間差異としての若者の行動様式一般について論じられている．

本研究では，後述するように，他の文化や社会と相互に関連づけながら若者文化を包摂的に把握する必要があると考えることから，若者文化を，世代内差異ではなく「世代間差異としての若者の行動様式一般」として捉えることとする．なお本研究では, 自己カテゴリ化[2)]によって若者文化はどのように捉えられるのかを明らかにすることを通して，若者文化に関する一視点を提案することを最終的な目的とする．

2015 年 3 月 12 日受付／ 2015 年 4 月 22 日受理
＊1 Tomofumi OWADA
関西福祉大学　発達教育学部

ここで，この自己カテゴリ化について簡単に触れておく．

従来，集団間行動や集団間差別を発生させる最小条件は，人をある集団に割り当てることであると考えられてきている（Tajfel，Billig，Bundy & Flament，1971）．

人は自分自身のカテゴリと他のカテゴリとの比較において，カテゴリ間の差異性を最大化することによって自身のカテゴリの評価を高めようと努めるものであるという．自身のカテゴリが社会的に肯定的なものであればあるほど，結果的により肯定的な自己概念の形成や評価が可能になるからである．集団間行動や集団間差別の基礎的な過程は，こうした他のカテゴリとの間の差異性の最大化と，当該カテゴリ内の差異性の最小化を伴った，自身に関するカテゴリ化（すなわち，自己カテゴリ化）と社会的比較であるとされる．このように，人は既存のあるカテゴリの特徴に従って自己カテゴリ化し，カテゴリ内の差異性の最小化（とカテゴリの間の差異性の最大化）により当該カテゴリのプロトタイプと一致するような認知傾向や行動傾向を高めていく（Hogg，1992，2006；Turner，1987）．すなわち，人があるカテゴリの成員として自己カテゴリ化をすることが，集団間行動や集団間差別の発生の必要十分条件ということになる（Billig & Tajfel，1973；Hogg，1992）．

このような自己カテゴリ化理論を若者文化にみる諸事象の理解のために適用した場合，以下のような利点が考えられる．すなわち，若者文化を世代内（すなわち，自身のカテゴリ）における差異を特徴づける事象として扱うことによって若者文化の把握が可能になるだけではなく，若者がある種の異端者として社会に現われたようなときに，それが先行世代や先行文化（すなわち，他のカテゴリ）からはどのように映るのかといった世代間差異およびその発生過程の視点からも若者文化を把握することが可能になる点である．この理解方略は，既述のような若者文化の包摂的な把握に際して，他の文化や社会との相互関連についての理解を促進しうる点において重要であろう．

そこで本研究では，自己カテゴリ化理論に従い，現代の若者の一特徴とみられる行動傾向の把握のされ方が，世代が異なることによって実際に異なってくるのか，つまり世代間差異がみられるのかを検討することとする．また，その差異に自己カテゴリ化の有無が直接関連してくるものかどうかもあわせて検討する．さらにそこから，「若者文化」をどのように読み取ることができるのかを考察する．

なお，「若者の行動様式一般」については，現代の若者の認知的特徴や行動傾向の一側面を適切に測定しうるものであることが望ましいため，大和田・鈴木・川田（2013）によって作成された「大学生活における被奉仕志向性尺度[3)]」を用いて検討することとする．

方　法

調査対象

関西地区の大学学部生（「若者」に相当）164 名，関東地区の社会人（30 歳代以上）56 名，計 220 名を対象に質問紙調査を実施した．回答は無記名，任意であった．有効回答者は 191 名（男性 92 名，女性 98 名，不詳 1 名），有効回答率は 86.8%，平均年齢は若者 19.07 歳（*SD* =1.32），社会人 56.39 歳（*SD* =13.57）であった．なお，若者の回答者２名については年齢が不詳であったが，一般的な大学学部生の年齢に相当することが受講者情報より明らかであったため有効回答者に含めた．

実験計画

世代（若者，社会人）×自己カテゴリ化の有無（教示文による操作）を要因とする２要因実験参加者間計画を用いた．

調査時期

2011 年７月上旬から９月上旬であった．

質問紙構成

大和田他（2013）によって作成された「大学生活における被奉仕志向性尺度」（Table 1 参照）を用いた．各項目について，「１（全くそう思わない）」から「７（とてもそう思う）」の７段階で回答を求めた．

自己カテゴリ化の操作に関する手続き

「大学生活における被奉仕志向性尺度」を実施する際に用いる教示文によって操作を行った．

自己カテゴリ化の操作を受ける若者に対しては，「以下にいくつかの考え方が挙げられています．今，『あなたが一般的な大学生である A さんだ』と仮定したときに，以下の内容はあなた（つまり，A さん）にどの程度あてはまると思うか回答してください」という教示文を用いた．

自己カテゴリ化の操作を受けない若者に対しては，「以下にいくつかの考え方が挙げられています．その内容を読み，それが『あなた自身』にどの程度あてはまるか回答してください」という教示文を用いた．

自己カテゴリ化の操作を受ける社会人に対しては，「以

下にいくつかの考え方が挙げられています．その内容を読み，それが『現代の一般的な大学生』にどの程度あてはまると思うか回答してください」という教示文を用いた．

自己カテゴリ化の操作を受けない社会人に対しては，「以下にいくつかの考え方が挙げられています．『あなたが一般的な年代の大学生である』と仮定したときに，以下の内容はあなた（つまり，一般的な年代の大学生）にどの程度あてはまると思うか回答してください」という教示文を用いた．

結果と考察

被奉仕志向性得点の各条件における平均値を Table ２に示した．世代と自己カテゴリ化を要因とする実験参加者間計画の分散分析を行ったところ，F1（「許容的奉仕の期待」）において世代と自己カテゴリ化の交互作用が有意傾向となった（$F(3,187)=3.71$，$p<.10$，$\eta^2=.020$）．そこで下位検定を行ったところ，社会人における自己カテゴリ化の単純主効果と，自己カテゴリ化なしにおける世代の単純主効果が有意もしくは有意傾向となった（$F(3,187)=4.05$，$p<.05$，$\eta^2=.022$；$F(3,187)=3.89$，$p<.10$，$\eta^2=.021$）．F2（「配慮的奉仕の期待」）においては有意な差はみられなかった．すなわち，「現代の一般的な大学生」として自己カテゴリ化された社会人は，自己カテゴリ化されていない社会人よりも「許容的奉仕の期待」が有意に高く，自己カテゴリ化されていない若者は自己カテゴリ化されていない社会人よりも「許容的奉仕の期待」が高い傾向にあった．以上より，現代の若者の一特徴とみられる行動傾向の把握のされ方には世代間差異がみられ，またその差異には自己カテゴリ化の有無が関連していることが示された．

社会人よりも若者において「許容的奉仕の期待」が高いという結果は，本尺度が現代の若者の認知的特徴や行動傾向の一側面を適切に測定しうるものであることの裏付けとなろう．また「現代の一般的な大学生」として自己カテゴリ化された社会人において「許容的奉仕の期待」が高まったことは，若者に対するいわゆるバッシングの発生と解釈することも可能である（Table １の各項目を参照）．社会人が，社会人としてのカテゴリから離れ「現代の一般的な大学生」に自己カテゴリ化されたことによって「許容的奉仕の期待」の各項目に対する親和性が高まったという結果は，普段は若者を意識せずとも，若者カテゴリが活性化されることによって若者カテゴリの中にあるネガティブな側面が注目されやすくなったことを示していると考えられるからである．このことは，自己カテゴリ化による他世代一般に対するバッシングの強化の可能性も示唆していよう．

こうした世代間におけるバッシングは，自己カテゴリ化理論（e.g.，Turner，1987）に従えば予想の範囲内の事象であるともいえる．もしも世代間バッシングが日常的な事象であるならば，これによって人びとの営みそのものが脅かされてしまう可能性は低いため，これをことさら問題視する必要もないのかもしれない．むしろ，バッシングがあるにせよ世代間に何らかの議論が交わされることは，お互いの文化に新たな成果をもたらす契機にさえなりうると考えられる．しかしながら，あまりに激しい世代間バッシングは不快であると同時に，逆にデメリットの方が大きくなる可能性ももちろんある．その可能性を小さくするための対策として，たとえば異世代間に共通する上位カテゴリを意識し，その上位カテゴリに

Table １．大学生活における被奉仕志向性尺度

F1：許容的奉仕の期待
私が友だちにノートを貸してくれと頼んだら，頼まれた友だちはノートを貸すことを，私は当然と思うことがある
私が授業に遅刻して教室に入るようなときでも，周りの人（教員や他の学生）はそれを許容することを，私は当然と思うことがある
友だちが私と一緒に遊んでくれることを，私は当然と思うことがある
教室で通路から遠い側に座っているときに退室したくなったら，周りの学生は私のために席を立つことを，私は当然と思うことがある
私のために友だちが席を確保しておいてくれることを，私は当然と思うことがある
私が教室の場所が分からないでいるときは，周りにいる人は親切に教えることを，私は当然と思うことがある
F2：配慮的奉仕の期待
教員が私のやる気を引き起こすような授業をすることを，私は当然と思うことがある
大学が学生のことを第一に考えて物事を決定することを，私は当然と思うことがある
教員は私が理解するまで教えることを，私は当然と思うことがある
教員が学生に笑顔で接するのを心がけることを，私は当然と思うことがある
大学が必要な連絡事項を全学生に周知徹底することを，私は当然と思うことがある
教員がパワーポイントの内容をプリントして学生に配布することを，私は当然と思うことがある

Table 2．被奉仕志向性得点の平均値（*SD*）

	F1	F2
若者・カテゴリ化あり（*n* =77）	3.10（1.02）	4.45（0.97）
若者・カテゴリ化なし（*n* =75）	3.29（1.10）	4.50（1.06）
社会人・カテゴリ化あり（*n* =22）	3.30（0.79）	4.64（0.87）
社会人・カテゴリ化なし（*n* =17）	2.76（1.09）	4.77（1.02）

† p <.10　＊ p <.05

再自己カテゴリ化を試みるのも一方途であろう．

しかし，そうしたことよりももっと重大な問題があるのではないかとも考えられる．たとえば，ある根拠のない若者バッシングが一人歩きをし，国の重要な政策決定などに影響を及ぼしている可能性は皆無といえるだろうか（浜島，2006 参照）．もしもそのようなことが実際に行われていれば到底看過することはできない．したがって，もしもそうであるならば，その決定過程に潜む諸問題（政策決定にまで導いてしまう諸要因）を地道に炙り出していくような作業の方が，世代間バッシングの形成過程やその是非の議論よりもよほど意義があるとも考えられよう．

本研究では，自己カテゴリ化によって若者文化はどのように捉えられるのかを明らかにすることを通して，若者文化に関する一視点を提案することを目的としていた．具体的には，自己カテゴリ化理論に従い，現代の若者の一特徴とみられる行動傾向の把握のされ方に世代間差異がみられるのかを検討した．さらに，その差異に自己カテゴリ化の有無が関連しているかもあわせて検討した．その結果，現代の若者の一特徴とみられる行動傾向の把握のされ方には世代間差異がみられ，またその差異には自己カテゴリ化の有無が関連していることが示された．このことから，自身のカテゴリとは異なったカテゴリが顕在化されることによって，顕在化されたカテゴリへのバッシングが発生する可能性が示唆された．ただし本研究では，「大学生活における被奉仕志向性尺度」の「配慮的奉仕の期待」については明確な結果を見出すことができなかった．また，若者に対する自己カテゴリ化の操作も結果に影響することはなかった．これらの点についてはさらに検討を加え，理論の精緻化を図ることが必要である．

引用文献

Billig,M., & Tajfel,H.（1973）. Social categorization and similarity in intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*, **3**, 27-52.

浜島幸司（2006）．若者の道徳意識は衰退したのか　浅野智彦（編）検証・若者変貌――失われた 10 年の後に――　勁草書房

広田照幸（2008）．若者文化をどうみるか　広田照幸（編）若者文化をどうみるか？――日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する――　アドバンテージサーバー

Hogg,M.A.（1992）. *The social psychology of group cohesiveness: From attraction to social identity*. London: Harvester Wheatsheaf.

Hogg,M.A.（2006）. Self-conceptual uncertainty and the lure of belonging. In R.Brown & D.Capozza（Eds.）, *Social identities*. Hove and New York: Psychology Press. pp.33-49.

伊奈正人（2004）．団塊世代若者文化とサブカルチャー概念の再検討――若者文化の抽出 / 融解説を手がかりとして――　経済と社会：東京女子大学社会学会紀要，**32**, 1 -23.

南田勝也（2006）．若者の音楽生活の現在　浅野智彦（編）検証・若者の変貌――失われた 10 年の後に――　勁草書房

宮台真司（2009）．新人類とオタクとは何だったのか　浅野智彦（編）若者とアイデンティティ　日本図書センター

内閣府（2003）．平成 15 年版　国民生活白書

内閣府（2010）．平成 22 年版　子ども・若者白書

中川慈代（2009）．若者文化における現実感覚の変容――村上春樹の作品を手がかりにして――　滋賀大学大学院教育学研究科論文集，**12**, 1 -10.

難波功士（2004）．「若者論」論　関西学院大学社会学部紀要，**97**，141-148.

大多和直樹（2008）．若者文化と学校空間――学校の遮蔽性と生徒集団の統合性はどう変容したか――　広田照幸（編）若者文化をどうみるか？――日本社会の具体的変動の中に若者文化を定位する――　アドバンテージサーバー

大和田智文（2006）．若者観察者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討　専修総合科学研

究，**14**，201-228.

大和田智文（2007）．若者の社会的アイデンティティにみる若者行動理解の諸相に関する検討　文研論集，**49**，11-33.

大和田智文（2010）．若者再考――自己カテゴリ化理論からの接近――　専修大学出版局

大和田智文・鈴木公啓・川田素子（2013）．大学生活における被奉仕志向性尺度の作成　関西福祉大学社会福祉学部研究紀要，**17**，37-49.

Tajfel,H., Billig,M.G., Bundy,R.P., & Flament,C.（1971）．Social categorization and intergroup behavior. *European Journal of Social Psychology*，**1**, 149-178.

Turner, J. C.（1987）．*Rediscovering the social group: A self-categorization theory*. Oxford: Blackwell.

注

1）本研究の「若者」は，従来の心理学における発達段階を厳密に踏まえた概念ではないため具体的な年齢の範囲は明示されていないが，内閣府（2003，2010），大和田（2006，2007）などをもとに，おおよそ10歳代中盤から20歳代までの者を想定する．

2）自己カテゴリ化のより詳細な内容については，大和田（2010），Turner（1987）などを参照されたい．

3）大和田他（2013）によると，「被奉仕志向性」とは，「『言わずとも察してくれ』たり『言わずとも許してくれるのが当然』といった捉え方を特徴とする認知傾向」を指し，「大学生活における被奉仕志向性」とは，「大学生が学内の生活において，教職員や友人，大学そのものなど，大学生自身と関わりを持つ他者から奉仕的態度で接してもらうことを当然のように思う程度についての認知的枠組み」を指す．

付記

本研究は，日本心理学会第75回大会ワークショップ「自己心理学における文化の問題（9）」において報告された内容を再構成したものである．